視点2

それでも行事はやって来る！

石矢友里
（元幼稚園教諭）

園行事には、入園式や卒園式などの式典、遠足などの園外保育、運動会や生活発表会、七夕や節分などの伝統行事、とさまざまなものがある。特に、運動会や発表会については、保育者は毎年頭を悩ませているに違いない。私もその一人だった。保育者生活で一番の苦い思い出は、新卒一年目の発表会でのことだ。

大げんかの発表会から

幼稚園で、生活発表会が近づいてきた。二年保育年少組で取り組んだのは〝おおきなおいも〟という劇遊び。クラスで読んでいた絵本『おおきなかぶ』を芋掘り遠足の経験に合わせてアレンジしたものだ。次々に動物たちが集まり、最後に大きなサツマイモを抜くというストーリー。その頃の私はどうやって劇遊びの指導をしたらよいかわからず、手探りの日々。子どもたちが思うように動いてくれないことに悩み、奮闘していた。

発表会当日。子どもたちより私のほうが緊張していた。とうとう私のクラスの番だ。ところが開始早々、芋を引っ張る順番をめぐり、三人の男児がつかみ合いのけんかを始めたのである。「これまでこんなことなかったのに……！」私の頭の中は真っ白。他の先生の力も借りてどうにか事態を収拾し、劇の最後まで

石矢友里（いしやゆり）
幼稚園教諭として、東京都公立幼稚園・認定こども園に7年間勤める。現在は、2歳になった息子の子育て真っ最中。

たどり着いた。その日は、職員室で大反省会。これまで劇に取り組んできた子どもたちにも、発表会を楽しみにしていた保護者にも、アドバイスをくれた先生方にも申し訳なく、自分の未熟さにただ涙が出るばかりだった。

持ち上がりで同じクラスの担任として年長組になった。そしてまた発表会の季節がやって来た。前年度の発表会から劇遊びがトラウマ状態の私は、不安で仕方がなかった。それでもやって来るのが行事。年長組では、自分たちでストーリーを考え、海賊が宝を探しに冒険に行くという創作劇をすることになった。

クラスで劇について話し合っている時のこと。ある子が「そういえば年少組の時、発表会でA君たちがケンカしたんだよね～！」と言うと、「そうそう！」「大変だったよね～あの時は」と皆その時のことを思い出し、口々に話しだした。当の本人たちは「へへへ～」「ごめんごめん！」「だってさぁ～」と苦笑いである。そんな子どもたちの姿に私も思わず笑ってしまい、「本当、大変だったよね～。みんな、こんなに頑張ってるんだもん！　今年はかっこいいところ見せたいよね！」と言葉が出てきた。すーっと肩の力が抜けた瞬間だった。それからは、私自身も楽しみながら練習や準備をし、本番を迎えることができた。

発表会当日。ちょっとしたハプニングはあったものの、劇は大成功。子どもたちも「やった～！」「ドキドキしたけど、楽しかった！」「頑張って練習したもんね！」と、満足感や達成感でいっぱいの表情だった。保護者も、「年少組の時を思い出すと信じられない」「毎日、家でも劇の話をしていたんです」「みんな一生懸命で、楽しそうに劇をしていたのが印象的でした」と話してくれた。

そんなエピソードを思い出すと、行事は、〝日常を切り取るもの〟であると感じる。保育者も、子どもも、保護者も、昨年の姿を思

い出し、比べて、一人ひとりの、そしてクラスとしての成長を実感できる大切な機会になるのだ。その時はわからないかもしれない。でも一年たってまた同じ行事がやって来た時、子どもたちのどんな経験も無駄ではなく、しっかり蓄積されているのだと、一年目の当時の私に教えてあげたい。

また一方で、行事は子どもたちの〝日常につながっていくもの〟であることも大切だ。例えば、運動会。運動会後に、遊びの中で運動会ごっこが始まる園も多いだろう。自分の種目に限らず、小さいクラスが大きいクラスのダンスをまねしたり、先生役になって教えたり。そうやって、大きいクラスの姿に憧れたり、小さいクラスの子どもたちが自分たちをまねしてくれるうれしさを感じたりしながら、運動会での経験が自分の中に落ちていくのだ。ある時は、消防署見学に行った翌日から、「〇〇組で火事だ！」と消防隊ごっこが始まったこともあった。行事での経験が遊びの刺激となり、子どもたちの日常である遊びにつながっていくのもまた、行事の特徴である。

当たり前だと思っていたけれど……

もう一つ欠かせないのが、伝統行事である。店頭に早々と並ぶ節分の豆やひなあられを見て、「どんな鬼のお面を作るか早く考えなくちゃ」「ひな人形の準備をしなくちゃ」と焦ったものだ。園では、その伝統行事にちなんだ物を子どもたちと作ったり飾ったりし、その由来をわかりやすく伝えることが多い。保護者から、「うちは毎年、園から持ち帰った鬼のお面をパパがかぶって豆まきをするんですよ」「先生に教えてもらった節分の由来を子どもが覚えてきて、話してくれました」「幼稚園で作った兄弟みんなの分のひな人形を並べて飾っているんです」と言われたことがある。

思えば、伝統行事とは本来、それぞれの地

域や家庭で行われてきたものである。園で伝統行事に取り組む時にも、地域や家庭とのつながりを忘れてはならないと感じた。

節分といえば、さまざまな園の先生方と、各園で節分の行事にどのように取り組んでいるかを話し合う機会があった。鬼の面を作ることは共通していた中、「職員が鬼に扮して園内を歩き回る。怖がって泣く子もいれば、立ち向かっていく子もいる」「鬼は自分のイメージ。そこにいると想像した鬼に向かって豆を投げる」「うちの地方では……」など、違う点も多かった。節分を園で取り組むねらい、活動内容……当たり前に、時期が来れば取り組むものだと思っていた伝統行事について、立ち止まって意見を交わすことが新鮮だった。

行事についてじっくりと考えるのは、これで二度目かもしれない。一度目は、勤めていた公立幼稚園が近隣の保育園と統合し、認定こども園になった時のことだ。開園一年目、保育者も子どもも、何だかいろいろな行事の準備に忙しい日々を過ごしていた。「行事に追われている」という声が聞こえるようになり、私も担任として、好きな遊びにじっくりと取り組める時間を確保してあげたいと思うようになった。皆で話し合い、開園前に園行事の年間計画を立てたはずなのに……。

そこで考えたことは、〝子どもたちにとって大切なことは何か〟〝伝えたいことは何か〟〝経験させたいことは何か〟ということだった。単純だけど、深い。当たり前のようにやって来る行事について、そうやってじっくりと考えることが、実は大切なのだと思う。

それでも行事はやって来る！　だけど、行事はたくさんのことを教えてくれる。そんなふうに考えながら、保育者も、子どもも、保護者も、準備から当日、そして余韻までをたっぷり楽しめたら、その行事は大成功である。